

仙台市市民文化事業団主催歴史総合イベント「桃山文化やしき」における 仙台藩茶道石州流清水派による講演と 手前披露



仙台藩茶道石州流清水派宗家十一世
「政宗公ワールド」プロジェクト理事
東北福祉大学特任教授・東北大学名誉教授

大 泉 道 鑑(康)



写真1 仙台藩祖伊達政宗公像 仙台市博物館蔵

今回の歴史総合イベント「桃山文化やしき」の主人公の仙台藩祖伊達政宗公（写真1 永禄十年〜寛永十三年―一五六七〜一六三六）は、鎌倉時代から続く名門伊達家十六代伊達輝宗公（天文十三年〜天正十三年―一五四四〜一五八五）と義姫（最上義光の妹 天文十七年〜元和九年―一五四八〜一六二三）の嫡男である。平成二十九年（二〇一七）は、我が郷土の英雄・政宗公の生誕四五〇年の記念すべき年を迎えた。政宗公は伊達文化の創始とその発展に多大な貢献をしたため、宮城県だけではなく山形県、福島県等の縁の地^{ゆかり}では、その祝賀・記念行事が数多く執り行われた。仙台市市民文化事業団主催「桃山文化やしき」も、その大きなイベントのひとつとして日立システムズホール仙台（仙台市青年文化センター）で、その年度の平成三十二年二月三・四日に開催された（写真2）。この趣旨は、郷土の誇り伊達文化を代表する伝統的文化・芸能を披露し、広く市民の皆様が、政宗公が生きた時代の桃山文化・伊達文化を体験し、それに浸^{ひた}って頂き、その文化の理解を深めてもらいたいと言う事である。伊達文化の中枢に常に存在してきた仙台藩茶道石州流清水派（当流）にも、このイベントへの参加の要請があったので、今回今に息づく「伊達な



写真2 「桃山文化やしき」の開催案内ポスター及びチラシ

文化」の魅力、特に当流の行った講演及び茶会について紹介したい。

本イベントで主役を果たした政宗公は、戦国時代にはその勇猛果敢さ故に、「独眼竜政宗」の勇名を天下に轟かせたが、残念ながら、政宗公の天下統一の夢は潰れてしまった。その後、本拠地を米沢城から岩出山城に移した頃からは、京都に長期にわたる滞在を余儀無くされた。そのため、若き政宗公は都の高度で最先端の桃山文化を吸収し、次第に洗練された美意識を身に付ける絶好な機会を得たと考えられる。更に岩出山城から仙台城（青葉城）へ移り、仙台藩の

政治的・経済的基盤を確固たるものにする事に心を砕く一方、伊達文化の礎を築き上げ発展させる事に成功した。当日は、政宗公の生きた桃山時代の文化を、ファッション・食・アート等の切口から紹介するため、見事に華開かせた「伊達な文化」が二日間にわたり順次披露されていた。まず、この「桃山文化やしき」における「ステージイベント」では、政宗公が仙台藩の縄張り始めに行なったと伝えられている金春流の能の仕舞で始まり、それに続き箏、三味線、尺八等の趣深い和楽器演奏（東北大学学友会邦学部）、更に、政宗公の時代から伝えられてきた柳生心眼流兵法の勇壮で見事な演武（仙台柳心会）、そして最後にこのイベントのハイライトである桃山ファッションショー（民族衣裳文化普及会）が華やかに行なわれた。このショーでは、一般市民から選ばれた十名のモデルが小袖や打掛等の時代衣装を身にまとったため、会場が盛り上がった。次に、「食文化」については、政宗公も好んで食したと言われている豆めしや芋の子汁等の戦国兵糧食（鐘景閣）が振舞われ、また政宗公時代から、その風味と優れた保存性が高く評価された仙台みそづくりワークショップ（亀兵商店）及び簡単なみそ汁づくり体験（明成高等学校）が行なわれ、大変な好評

を博した。一方、「文化講座」では、政宗公が当流一世清水道閑（天正七年～慶安元年―一五七九～一六四八）を仙台藩の初代茶道頭に招聘して創始された仙台藩茶道を、今に伝える当流の筆者を含めて六名の演者が、それぞれ講演を行なった（表1）。ここでは、まず「政宗公のまちづくり」（木村浩二仙台段差崖会崖長）の演題の講演から開始され、「伊達家の正式な茶道」（筆者）、「桃山時代のファッション～政宗公を中心に」（高橋あけみ仙台市博物館学芸員）、「古武術は強いのか」（榎戸由樹仙台市市民文化事業団、武術家）、「桃山時代の絵画」（内山淳一仙台市博物館副館長）及び「政宗公と桃山陶磁」（金森安孝仙台市富沢遺跡保存館々長）と言う興味深い演題について、逐次講演が行なわれた。これには、多くの市民が熱心に耳を傾けていたが、政宗公縁の文化の理解を深めるまたと無い機会であったと、極めて好評であった。以上述べたイベントに加え、後で詳しく述べる当流が担当した講演及び茶会その他に、手作り甲冑（松島甲冑作り愛好会）、小袖着（民族衣裳文化普及会）、着物着付（梅らぶ）等の市民参加型の「体験イベント」が多数実施された。なお、主として桃山美術工芸品の「展示」もギャラリーで行なわれ、市民の熱い視

表1 「桃山文化やしき」における文化講座（講演会）のプログラム（於 研修室）

日 時	演題	講演者（所属）
2月3日 11:10～12:30	「政宗公のまちづくり」	木村浩二（仙台段差崖会崖長）
13:00～14:00	「伊達家の正式な茶道」	大泉道鑑（仙台藩茶道石州流清水派 宗家十一世）
14:30～15:50	「桃山時代のファッション ～政宗公を中心に」	柳生心眼流兵法仙台柳心会
2月4日 11:30～12:50	「古武術は強いのか」	榎戸由樹（仙台市市民文化事業団、武術家）
13:30～14:50	「桃山時代の絵画」	内山淳一（仙台市博物館副館長）
15:30～16:50	「政宗公と桃山陶磁」	金森安子（仙台市富沢遺跡保存館々長）

線が注がれた。今回のイベントには延べ二、三三六名の市民が参加し、大変盛会裏に終了した。以上述べたこれらのイベントの内容については、伊達政宗生誕四五〇年記念プロジェクト記録『伊達政宗生誕四五〇年』(宮城県発行)に記載されているので、参照して頂きたい。

さて、ここで政宗公と茶道との関わりについて、『伊達家治家記録』『貞山公治家記録』に記されている政宗公の茶事に関する記事に注目してみた。まず、江戸幕府初代將軍徳川家康(天文十一年〜元和二年―一五四二〜一六一六)、二代將軍徳川秀忠(天正七年〜寛永九年―一五七九〜一六三三)、三代將軍徳川家光(慶長九年〜慶安四年―一六〇四〜一六五二)等の將軍を初め有力大名の名前が現われる。次に、千利休(大永二年〜天正十九年―一五二二〜一五九二)を初め、家康の茶頭今井宗薫(天文二十一年〜寛永四年―一五五二〜一六二七)、秀忠の茶道指南役を務めた古田織部(織部流の流祖、天文十三年〜元和元年―一五四四〜一六一五)、片桐石見守貞昌(石州)^{かたぎり いわみの かみさだまさ}(石州流の流祖、慶長十年〜延宝元年―一六〇五〜一六七三)の師桑山左近(宗仙)(永禄三年〜寛永九年―一五六〇〜一六三二)、更に家光の茶道師範を務めた小堀遠州(遠州

流の流祖、天正七年〜正保四年―一五七九〜一六四七)等の当時一流の多くの茶人とも盛んに行き来を重ねていた。以上述べた記事から、政宗公は若い時分から茶の湯に堪能で、政治・外交を行うために、茶会を活用して將軍・大名及び当時の大茶人との交流を深めていった事が、容易に推察出来よう。

先に触れた「文化講座」において、筆者は初日の午後一時から、「伊達家の正式な茶道」と言う演題の講演を行った(表1)。その内容については、紙面の都合によりその当日配布された資料の「要旨」(写真3)を示すと共に、筆者が今回強調した箇所^{あらすじ}の粗筋のみ述べたい。講演の最初の「茶道の歴史の概略」については、筆者はわび茶を創生した村田珠光(應永三十年〜文亀二年―一四二三〜一五〇二)、更にそれを大成させた千利休(大永二年〜天正十九年―一五二二〜一五九二)の二人の大茶人が成し遂げた「わび茶の創始と大成」と言う歴史的大事業について解説した。これに関連して、「茶聖利休の切腹事件」に対する政宗公の関わり¹について、専門の研究者の最近の見解を述べた。次に、「大名茶の成立」、「徳川將軍家の茶道石州流の特徴」、更に今回の主題となった政宗公による「伊

伊達家の正式な茶道

仙台藩茶道石州流清水派宗家 十一世 大泉 道鑑

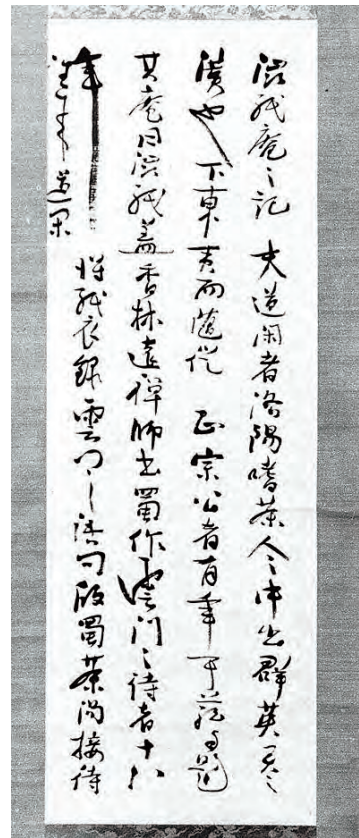
仙台藩々祖伊達政宗公は、藩の政治的・経済的基盤を確立させただけでなく、当時の最先端の桃山文化を導入し、高度な「伊達文化」を生み出した事も、我が郷土の誇りである。仙台藩茶道は、政宗公が、織部流の祖古田織部公の高弟一世清水道閑を仙台藩茶道頭に抜擢した事に端を発している。そのため、瑞鳳殿で行われる政宗公の遠忌法要で、毎年献茶を行っている。ところで、あの有名な「伊達騒動」の主人公四代藩主伊達綱村公は、儒教や仏教等を重視した文教政策を積極的に推進し、特に茶道に傾倒してその道を極めた数奇大名として、天下に名声を馳せた。この綱村公の指南役を務めたのは、最初二世清水道閑で、石州流の祖片桐石見(いわみ)守貞昌(石州)公(将軍徳川家綱公の茶道指南)の高弟として、著名であった。また、二世道閑は石州公が将軍家の茶道の規格を定めた『石州流三百箇條』の註解書の著者としても、歴史にその名を刻んだ。道閑没後、三世清水道竿が綱村公の茶道師範となり、石州流清水派(当流)を仙台藩に確立させると共に、全国各藩にもこの流儀を広めた功績から、当流の祖と称されている。当流は、歴代藩主の庇護のもとに代々の茶道頭により、明治以降はそれを継承した代々の宗家により、藩政時代の流儀が変わる事なく連綿と今日まで受け継がれてきた。なお、仙台藩茶道の正式な流儀である当流を継承した印として、二世道閑の著書『清水道閑註解石州流三百箇條』(三巻)と『動閑茶湯書』(十八冊)、二世道閑筆『洪紙庵之記』(掛軸)及び老中松平周防守康福(妙閑子)自画賛『片桐石見守貞昌宗閑居士像』(掛軸)は、歴代の茶道頭・宗家を経て当代十一世大泉道鑑まで引き継がれてきた。上に述べた理由から、当流が「伊達文化」を最も色濃く残した貴重な文化的・芸術的遺産であるといっても過言ではあるまい。そこで私共には、この流儀を正しく後世に未来永劫伝えていく責務があると考えている。

写真3 「文化講座」における筆者の講演要旨

達家(仙台藩)の茶道の創始」とそれに続き当流の祖三世清水道竿(寛文二年〜元文二年―一六六二〜一七三七)の功績「当流の確立と発展」について、詳細な説明が行なわれた。これに関連する事項として、筆者は「当流の特徴の歴史的考察」を述べたが、当流が藩政時代のまま今日まで^{いまだ}些かも変わらず、正しく継承されてきた要因となったと考えられる仕組みを具体的に二つ提示した。そのひとつは、当流の歴代の茶道頭・宗家を経て筆者まで伝えられたその継承の証^{あかし}の「三種の文獻」(写真4)が、実際に「三種の神器」の役目を果たしてきた事である。もう一方は、藩主あるいは天皇家(勅使)の成りの茶事にだけ披露される「極真の手数」である。藩主及び勅使



『片桐石見守貞昌宗閑居士像』妙閑子
やすよし
(老中松平周防守康福)自画賛



『洪紙庵之記』二世清水動閑筆



『清水動閑註解石州流三百箇條』三巻及び『動閑茶湯書』十八冊

写真4 「三種の神器」の役割を果たしてきた当流の「三種の文献」十一世大泉道鑑蔵

は例外として、この手数（手前）は、当流の後継者のみが見聞する事が許されると言う最も重要な「掟」になっていたため、これによっても当流及びその継承者が守られてきた事になると、最後が締め括られた。

ところで、初日の茶席の準備は、当流道門会の皆様によつて午前十時から開始され、何の支障もなく速やかに整えられた。当流による正式な茶会「伊達家の茶席」は、本ホールの茶室で厳かな雰囲気の中で行なわれた（表2）。

茶室の床には四代藩主伊達綱村公（万治二年）享保四年一六五九（一七一九）筆による掛物（写真5）が掛けられた。なお、綱村公は、数奇大名として全国にその名を馳せ、三

表2 伊達家の茶席（仙台藩茶道石州流清水派）のプログラム

日時：平成30年2月3日（11:00～）、4日（11:30～）
場所：日立システムズホール仙台（茶室）
亭主：十一世大泉道鑑

日	席	（時間）	手前
2月3日	一席	（11:00～11:30）	大泉道紀（教授）
	二席	（12:40～13:10）	守屋道美（教授）
	三席	（15:30～16:00）	細谷道清（教授）
2月4日	一席	（11:30～12:00）	大泉道紀（教授）
	二席	（13:00～13:40）	守屋道美（教授）
	三席	（14:30～15:00）	守屋道美（教授）



写真6 棗「六十二万石」
（銘：仙台伊達家十八代当主伊達泰宗様）
十一世大泉道鑑蔵



写真5 掛物『綱村公御歌』
仙台藩四代藩主伊達綱村公筆
十一世大泉道鑑蔵

世道竿を二世清水動閑（慶長十九年～元禄四年―一六一四～一六九一）の後継者に指名した藩主としても有名である。その三世道竿は、後に綱村公の支援のもと当流を藩内に確立させただけでなく、徳川將軍家数奇屋頭（格）谷村三育（？～宝暦三年―？～一七五三）を初め、その弟子達は將軍家・他藩にも及び、それぞれ各藩で活躍したため当流・清水派が全国各地に急速に広められた（図）。また、本茶会で用いられた棗は、仙台伊達家十八代当主伊達泰宗様により「六十二万石」と銘が付けられた大棗である（写真6）。この大棗は、泰宗様の特別なお取り計らいにより、東京国立博物館学芸員中島淑枝氏が十世大泉道鑑（明治四十二年～平成二十二―一九〇九～二〇一〇）のために製作したものである。この美しい大棗の表側は、伊達家の家紋「竹に雀」が描かれ、その蓋の内側には泰宗様の花押が印されている。この大棗こそは、伊達家・藩主と当流の宗家・茶道頭の太い永遠の絆を正に象徴するものとして、特に大切に扱われている。

筆者が、司会進行（解説）を務めた茶室における茶会の全ての手前は、当流の錚々たる教授達が行う事にした（表2）。まず初日の一席目は、大泉道紀（宗家代理・教授）

による薄茶の手前であったが、この席では当流の手前の特徴を一言で表す言葉とされてきた「雅（みやび）たわび」の真髓（まゐ）を正に感じさせる見事な手前が、披露された（写真7）。この道紀による手前については、「当流歴代の茶道頭が藩主に茶道指南を行なっていた、この上もなく優美な手前と道紀の磨き抜かれた技とがあいまって、道紀の手前は、世界で最も美しい。」と、先代の十世道鑑の御墨付をもらっていたものである。このような訳で、かつて藩政時代に青葉城で行われていた藩主の関わった正式な茶会を、今回ほうふつさせたと考えている。従って、このような事が可能である当流は極めて稀有（けう）な存在であり、伊達文化の中核を成していた貴重な文化遺産として、ある意味では奇跡的に藩政時代のまま生き残り、現在に至っていると言えるよう。

一席終了後、二席守屋道美（教授、写真8）及び三席細谷道清（教授、写真9）の二名の教授により、いかにも大名茶らしい威風堂々たる、しかも優美な手前が肅々（しゆしや）と行なわれた。当日の参加者からは「さすが高度な伊達文化の中心的存在であり続けた流儀だ。」等身に余るお誉め（ほ）の言葉を頂き、筆者はこの貴重な伊達文化を継承した者としての責任の重大さをひしひしと感じると共に、見る人に

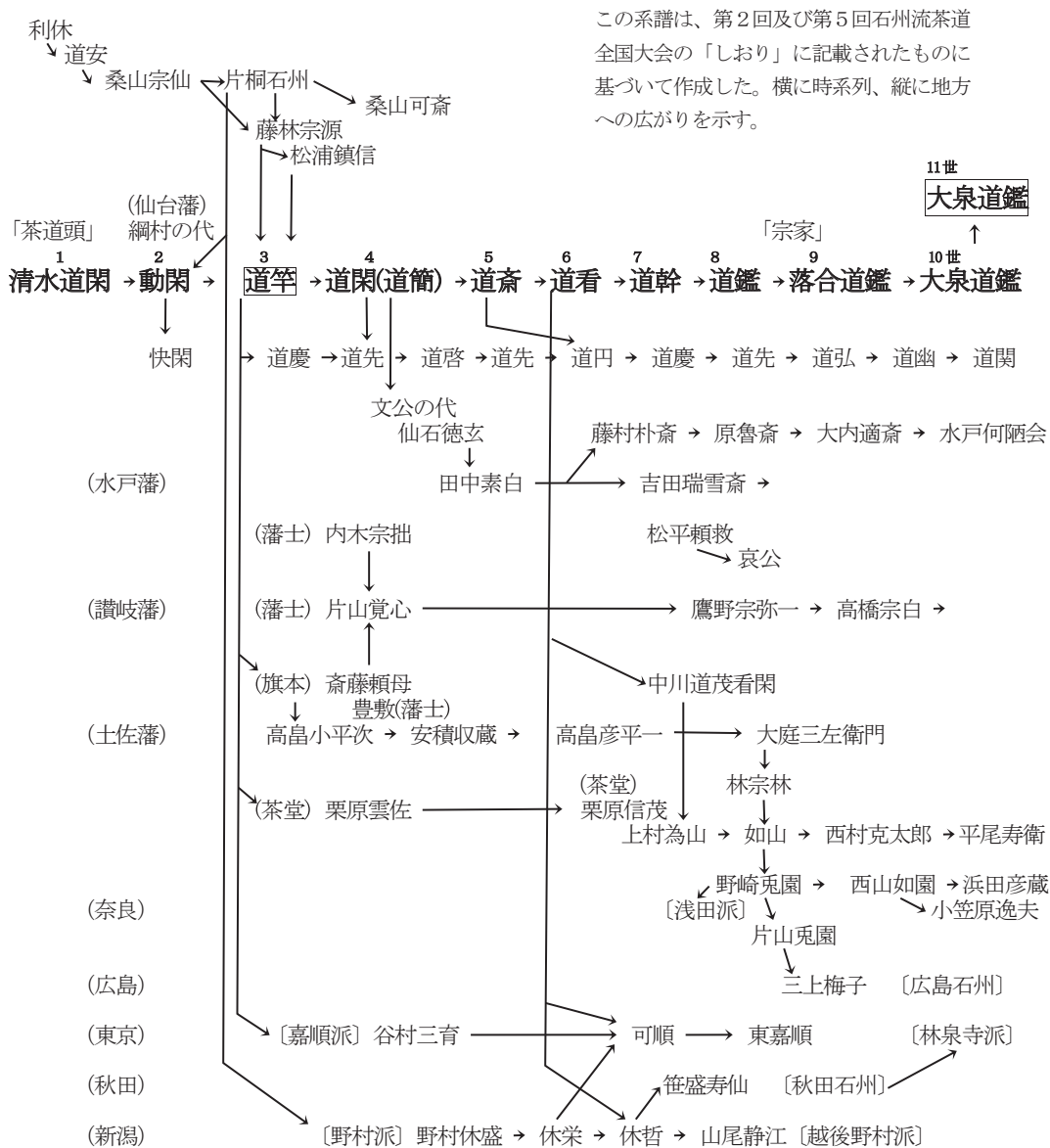


図 石州流清水派の系譜



写真7 茶室 一席 大泉道紀(教授)の手前



写真8 茶室 二席 守屋道美(教授)の手前



写真9 茶室 三席 細谷道清(教授)の手前

深い感動を与えるほどすばらしい手前を披露した教授達に、心から感謝した次第である。なお、この一日目の茶室の様子や手前が You Tube (<https://www.youtube.com/watch?v=XVQRudkzYjY>) により、全世界の人々に紹介されているので、参考にして頂きたい。

一方、本ホールの和室で行なわれたもうひとつの茶会「お気軽お茶体験」は、茶室で行なわれた茶会と同時平行的に進行していった(表3)。この様な公な茶会では、弟子の

坂本文葉が初めて司会進行役を兼ねた亭主と言う重要な役割を演じる事になった。この和室の床には、二代藩主伊達忠宗公(慶長四年〜万治元年―一五九九〜一六五八)自画賛の『忠宗公御歌 梅ヶ香』と言う掛物(弟子の亀田治所持)が、この日のために特別に掛けられた(写真10)。初日の十二時十分に亭主の開始の挨拶が行なわれた後、亀田治による一席目の手前が開始された。この茶会の最初の席で、しかも多くの参加者が見守り、多少緊張感の漂う雰囲気

表3 お気軽お茶体験（仙台藩茶道石州流清水派）のプログラム

日時：平成30年2月3日・4日（12：10～）
場所：日立システムズホール仙台（和室）
亭主：坂本文葉

日	席	（時間）	手前
2月3日	一席	（12：10～12：50）	亀田治
	二席	（13：20～14：00）	金城道里（師範）
	三席	（14：40～15：20）	金城道里（師範）
	四席	（16：20～17：00）	今崎道篤（師範）
2月4日	一席	（12：10～12：50）	亀田治
	二席	（13：40～14：20）	金城道里（師範）
	三席	（15：10～15：50）	金城道里（師範）
	四席	（16：20～17：00）	守屋道美（教授）

気の中での手前であつたが、さすがに日頃の熱心な稽古が
実を結び、流れるような美しい手前を披露する事が出来た
（写真11）。次の二席及び三席を務めたのは、金城道里（師
範）で通常通りに堂に入った優美な手前を披露し、その大

きな責任を果たした（写真12）。四席では、今崎道篤（師範）
によりいかにも大名茶らしい威風堂々たる手前が行なわれ
た（写真13）。なお、一日目の四席では、守屋道美（教授）
がこの茶会の最後の締め（ふさ）に相応しい見事な手前を、披露し
て有終の美を飾つたため、ここでも「王朝絵巻を見ている
ような優美な手前」との高い評価を得た。

当流が担当した二つの茶会は、二日とも大過なく無事終
了に漕ぎ（こぎ）付ける事が出来た。これは、ひとえに手前を担当
した弟子達が日頃熱心に稽古に精進した事に加え、坂本文
葉（写真14）が趣向（こころ）を凝らし、和室の茶会の亭主の重責を
見事に果たした結果によるものであり、筆者は当流（わづら）を預る者



写真10 掛物『忠宗公御歌 梅ヶ香』
仙台藩二代藩主伊達忠宗公自画賛
亀田治蔵



写真11 和室 一席 亀田治の手前



写真12 和室 二席及び三席 金城道里(師範)の手前



写真13 和室 四席 今崎道篤(師範)の手前

として感謝の気持ちでいっぱいである。

藩政時代には、当流の歴代の茶道頭は青葉城で藩主の茶道指南役と言う重責を担うと共に、そこで行われた茶会では指導的役割を果たしてきた。そこで、今回の行なわれたいずれの茶会でも、藩政時代青葉城で行なわれていた「正式な藩主による茶会」を、再現すべくあれこれと腐心した次第である。一方、今回披露されたのは薄茶の手前であったが、当流では薄茶が「真の茶」として重んじられてきた。

これについては、利休の高弟山上宗二（天正十三年～天正十八年―一五四四～一五九〇）が著わした茶道秘伝書『山上宗二記』の中の「茶湯者又拾躰」及び三世道竿が著わした『道竿拾躰』には、「濃茶ではなく薄茶が真の茶と言う」と記されており、これが藩政時代からの当流の伝統となった。

これを機に筆者は、政宗公生誕五〇〇年の大きな節目の年に向けて、当流の更なる発展のため鋭意努力する事を、



写真14 和室亭主役の坂本文葉(手前は金城道里)

藩祖政宗公を初め歴代の藩主並びにその指南役の務めを果した当流の歴代の茶道頭・宗家達に、改めて真摯^{しんし}に誓った次第である。

謝 辞

歴史総合イベント「桃山文化やしき」において、文化講座の講演を行なう機会を、また当流の手前を披露する機会を下さった主催者の仙台市民文化事業団の関係各位に深謝申し上げます。また、当流の茶会にご支援下さった「梅らぶ」代表中野由美氏並びに「伊達政宗公像」の写真掲載の許可を下さった仙台市博物館に、併せて厚くお礼申し上げます。

参考文献（五十音順）

『関』二十八号「仙台藩茶道石州流清水派の祖三世清水道竿の業績（その三）道竿著『道竿拾鉢』の解説研究」

十一世大泉道鑑 平成三十年

『原色茶道大辞典』井口海仙、末宗広、永島福太郎（監修）

淡交社 昭和五十年

『茶道辞典』桑田忠親 東京堂 昭和四十三年

『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』

十世大泉淑子（道鑑） 丸善出版センター 昭和五十五年

『忠宗公御歌 梅ヶ香』 二代藩主伊達忠宗自画賛

亀田治蔵

『伊達家治家記録』伊達家編纂 仙台市博物館蔵

『茶の湯文化学』二十八号「道竿拾躰」（解説） 十世大泉道鑑

十一世大泉道鑑 平成二十九年

『綱村公御歌』四代藩主伊達綱村筆 十一世大泉道鑑蔵

『道竿拾躰』三世清水道竿 東北大学中央図書館蔵

『山上宗二記付茶話指月集』熊倉功夫 岩波文庫

平成十八年

『よくわかる茶道の歴史』谷端昭夫 淡交社 平成十九年

『利休の生涯と伊達政宗―茶の湯は文化の下剋上―』

生形貴重著 河原書店 平成二十九年

参考資料

『伊達政宗公生誕四五〇年』宮城県 平成三十年

You Tube <https://www.youtube.com/watch?v=XVQRuDbkzY>